

附 編

津島岡大遺跡第5次調査出土の堅櫛の塗膜構造および  
鹿田遺跡第3次調査出土の刀子柄の保存処理について

岡 田 文 男

はじめに

津島岡大遺跡および鹿田遺跡は沖積平野上に立地し、現在までの発掘調査により多数の木製遺物が出土している。今回は津島岡大遺跡第5次調査で出土した縄文時代後期中葉の堅櫛の塗膜構造と、鹿田遺跡第3次調査で古墳時代の井戸から出土した木製の柄のついた刃子の保存処理について報告する。

1 津島岡大遺跡第5次調査出土の堅櫛の塗膜構造について

堅櫛(図17)の製作技法を明らかにするため、塗膜構造の顕微鏡観察を行った。分析資料は堅櫛から剝落した塗膜片である。

方 法

試料の大きさは約2mm×3mmで、それをさらに3分割してエポキシ樹脂に包埋して研磨し、落射光および透過光で塗膜構造の観察を行った。

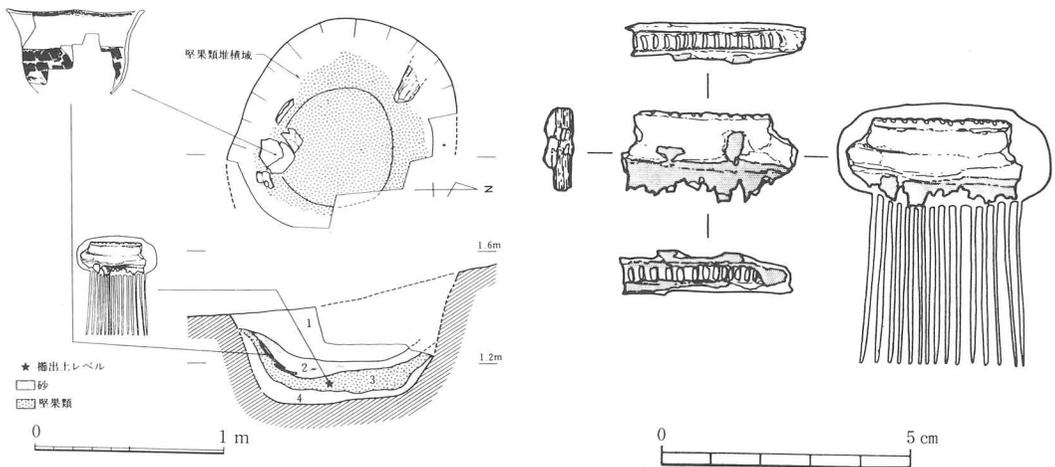


図17 津島岡大遺跡第5次調査出土の堅櫛とその出土状態

塗膜断面の観察結果（巻頭カラー写真図版2-A・B・C）

透過光による塗膜断面の観察結果を示す。塗膜の下部に黄褐色を呈し、層中に透明鉱物や土が含まれる、いわゆる地粉漆層がある（a層）。a層は下地に相当し、その上面には起伏がある。ついでa層の上にa層の起伏をならすように黄褐色を呈する透明な層がある（b層）。b層の上に、剝離した空間をはさんで赤色顔料を含む層が2層ある（下からc層とd層）。c層とd層の境界はやや分かりにくい、赤色顔料はどちらも辰砂で、d層中の辰砂の粒径は最大で約 $5\mu\text{m}$ である。C層の辰砂はそれより細かい。

## 2 金属部分が残存する刀子の柄の保存処理

金属部分が残存する刀子の柄（図18）の保存処理を行った。金属部分が残ることから保存処理方法として水を用いない高級アルコール法を採用した。処理方法は以下の通りである。

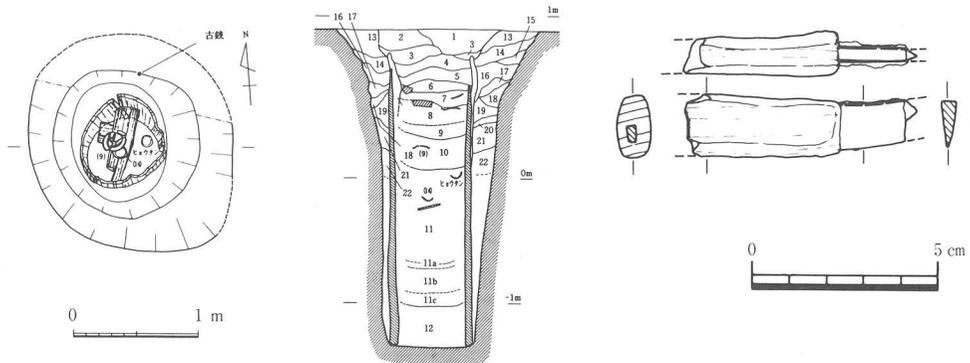


図18 鹿田遺跡第3次調査出土の刀子とその出土状態

### (1) 脱水処理と脱水終了の確認

遺物をメタノールにつけて脱水処理を行い、液を数回交換した後、キシレンを滴下して脱水の確認を行った。

### (2) 高級アルコールの含浸

刀子の柄が広葉樹であることから、セチルアルコール（融点 $49^{\circ}\text{C}$ ）を用い、アルコールの含浸開始濃度を20%とし、保温条件（ $55^{\circ}\text{C}$ ）のもとで順次濃度を上げて最終的に100%濃度にして取り出した。

### (3) 表面処理

木材部分についてのみアルコールで洗浄した。

注1 『津島岡大遺跡』4 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター1994

2 『鹿田遺跡』3 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター1993

付 記 図2の刀子実測図は『鹿田遺跡』3に掲載した実測図に加筆したもので、その作成には岡山大学埋蔵文化財調査研究センター調査研究員の松木武彦氏の手を煩わせた。

1995年2月28日 印刷  
1995年2月28日 発行

岡山大学構内遺跡調査研究年報11 1993年度

編集 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
岡山市津島中3丁目1番1号  
(086)251-7290

印刷 西日本法規出版株式会社  
岡山市高柳西町1-23  
(086)255-2181(代)